

日本女性科学者の会 (SJWS) 北海道・東北ブロック

北海道・東北通信

復活1号



令和2年3月発刊

－ 北海道・東北ブロック長より皆様へ －

梅津 理恵

2019 年度より北海道・東北ブロック長を仰せつかりました。日本女性科学者の会へ入会したのは 2010 年頃だったと思います。当時は積極的に行事に参加するような会員ではありませんでしたが、2015 年度に理事に就任したことで、会の運営に携わるようになってからはじめて色々な事に気づいたという次第です。それぞれの企画毎に様々な趣向を凝らして、会を盛り上げていこうと尽力されている他の理事の先生方の姿を見るにつけ、もっと早くから行事等へ参加しておけばよかったと思うのでした。普段所属しているような専門分野の学会とは異なり所帯はこじんまりとしています。専門分野は幅広く多岐に渡り、話題の豊富さに驚かされます。そして、女性同士というのはすぐ打ち解けあうのか、男性が 95% を占める部局に普段所属している身としては、会での活動はどこかしらホッとするような安堵感を覚えます。

さて、日本女性科学者の会(SJWS)の活動や運営などを執り行っている理事会ですが、理事以外の会員の方たちにはなかなかその動きがみえないのでは? と思い、このような寄稿をしようと思いつきました。総会や理事会の議事録、SJWS の定款や規則集、会員名簿などは SJWS のホームページの「会員専用ページ」に入って頂けると見ることが出来ます。ただし、会員専用ページに入るにはログイン ID とパスワードが必要で、本部より年会費振込のご案内と一緒にお手元に届いているかと思います。そんなのが付かなかった、という方はどうか本部かブロック長まで遠慮なくお問い合わせください。

2019 年度に開催された理事会の審議事項や内容についてざっとお知らせします。すべては網羅しておりませんので、詳細は会員専用ページをどうぞご覧ください。

第 30 回 (令和元年度第 1 回) 理事会 : 2019 年 5 月 26 日 (日) 学士会館にて

この日の午後は第 24 回日本女性科学者の会奨励賞と功労賞の贈呈式と懇親会が企画されており、昼前の短い時間で開催されました。主な審議事項として、代表理事(会長)の選出とブロック長の選出が行われました。また、各委員会の委員長も合わせて選出されました。この日の午前中は定例総会も執り行われ、1 年のうちで SJWS 会員が一番多く集う場でありました。

第 31 回 (令和元年度第 2 回) 理事会 : 2019 年 6 月 16 日 (日) 青山学院大学青山キャンパスにて

前回の理事会で審議事項にあった委員会メンバーについて委員の追加があり、SJWS や各ブロックの年間計画について承認がありました。また、サイエンスコミュニケーターの資格認定や新入会員の承認、次年度の奨励賞・功労賞の募集要項の内容に関して審議されました。

第 32 回 (令和元年度第 1 回臨時理事会) 理事会 : 2019 年 8 月 3 日 (土) web 会議にて

新入会員の承認、およびサイエンス・コミュニケーターの承認がありました。

第 33 回 (令和元年度第 2 回臨時理事会) 理事会 : 2019 年 10 月 16 日 (土) web 会議にて

新入会員の承認がありました。

第34回（令和元年度第3回）理事会：2019年12月8日（日）東京工業大学・田町キャンパスにて11月に締め切った奨励賞の応募状況をもとに、外部評価に出す候補者の選出を行いました。今年度は全部で14名の応募があり、5名が外部評価の候補者となりました。また、功労賞の推薦書類をもとに受賞候補者を審議しました。新入会員の承認、共催事業等の申請書の様式修正、および共催事業の承認が行われました。また、継続審議となっている功労賞受賞者の特別ポストに関する話し合いが行われました。

第35回（令和元年度第4回）理事会：2020年3月8日（日）東京工業大学・田町キャンパスにて奨励賞の外部評価を受ける候補者5名に対する評価内容が審議され、2020年度の奨励賞受賞者が決定しました。また、功労賞授賞候補者2名についても代表推薦者より受賞の意思の確認が行われたことが示され、功労賞授賞者も決定しました。他には、学術誌の投稿規定の修正、新入会員の承認、入会・退会の手順について、講演料の目安などが審議されました。継続審議となっている、理事の自薦については引き続き継続審議となりました。

第36回（令和元年度第5回）理事会：2020年4月12日（日）東京工業大学・田町キャンパスにて（予定）

このように、例年、年5回程度の理事会が開催されています。昨年の第5回理事会では1年間の活動報告、収支報告がなされ、新年度の活動計画案と予算案について審議されました。また、次回も定例総会に向けての準備・打ち合わせが行われることでしょう。

年間行事としては、定例総会、および賞贈呈式の開催、例会や学術シンポジウム、新春懇談会の開催、学術誌やニュースレターの発行が主なものです。昨年はSJWS60周年記念事業として学術大会と記念祝賀会が2018年11月3日（祝日）に昭和女子大学コスモスホールにて開催され、記念誌とロールモデル集が参加者に配布されました。また、SJWS参画事業として、女子中高生夏の学校への参加、夏休み科学教室の共催、男女共同参画学協会連絡会シンポジウムへの参加、国際婦人連絡会の活動へ参加、クォーター制を推進する会（略称「Qの会」）の活動への参加をしております。

以上のように様々な活動をSJWSとして行っておりますが、会員の皆さんが身近に会の活動を感じて頂くには、ブロック単位での活動が重要であると考えます。皆さんが参加したいと思えるような魅力的な活動、SJWSに入会してよかったと思って頂けるような繋がりを持つ場となれるよう、努力したいと思います。というわけで、今年度は新春懇親会と、この「北海道・東北通信」を再開させることにしました。

新春懇親会は2020年1月25日（土）にホテルレオパレス仙台のイタリアン・レストラン、「トラットリア・クチーナ・オランジェリー」にて開催しました。ちなみに、北海道・東北ブロックの会員数は33名（北海道11名、東北22名、SJWS全体では300名弱）。ブロック単位とはいうものの、なかなか一斉に集うのは難しいとは思いますが、まずは開催しました。残念ながら急用で2名が欠席となりましたが、5名の会員が集い、ささやかではありましたがおいしいランチを食べながら近況報告や今後のブロック活動について密な話し合いを行いました。東北、なかでも仙台は「学都仙台」と呼ばれているだけに、多くの大学が存在しているにもかかわらず、なかなか会員数を増やすことが出来ておりません。会員増に向けた取り組みとして、仙台近辺の私大などをターゲットにした研究会等の企画をしてはどうか、などの意見を出し合いました。また、北海道・東北地区で開催されるワークシ

ヨップやセミナーなどの情報をメーリングリスト等を用いて周知していきたいと思っておりますので、そのようなお知らせがある場合は、ブロック長（梅津）まで連絡願います。

SJWS 全体の行事の中でも、新春懇談会は各ブロックの持ち回りとなっているので、北海道・東北ブロックが担当となった場合は、比較的参加し易いかと思います。近年では、2016年1月10日（日）にホテルレオパレス仙台・カンファレンスルームにて開催し、栗原和枝先生（東北大学 WPI-AIMR、多元研・教授）、宮城妙子先生（宮城県立がんセンター研究所・共同研究員）に特別講演をして頂きました。2019年1月12日（土）は仙台市シルバーセンター6階・第2研修室で開催し、益見厚子先生（青森大学薬学部・教授）、有働恵子先生（東北大学災害科学国際研究所・准教授）、藤村維子先生（東北大学男女共同参画推進センター(TUMUG)・特任講師）よりご講演頂きました。次回開催の際は少しでも多くの会員に参加して頂きたく思います。以下、仙台で開催された新春懇談会の講演タイトルをご紹介します。近い将来、講演を依頼された際はどうか御快諾頂けますよう宜しくお願いします。

2016年1月10日（日）ホテルレオパレス仙台・カンファレンスルーム

栗原和枝先生「表面測定と材料科学への展開」

宮城妙子先生「シアリターゼ研究：がん診療への応用をめざして」

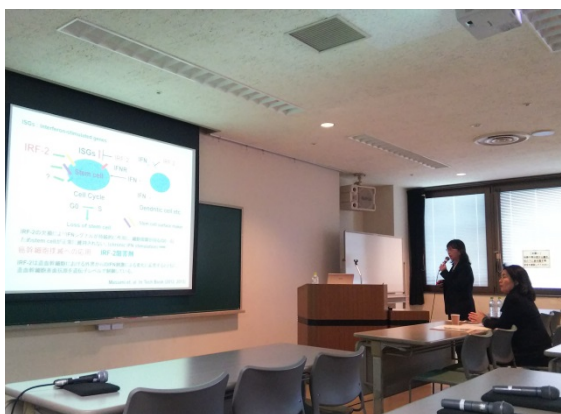
2019年1月12日（土）仙台市シルバーセンター6階・第2研修室

益見厚子先生「インターフェロン制御因子(IRF-2)の生物学的機能について」

有働恵子先生「消えゆく砂浜 ～砂浜の未来について考える～」

藤村維子先生「東北大学男女共同参画推進センターの取組み

～女性研究者のさらなる活躍とダイバーシティ研究環境の実現を目指して～」



2019年1月12日の新春懇談会にて
講演中の益見先生と座長の本間先生（左）と功刀会長と講演者を囲んで（右）

北海道・東北ブロック長 梅津 理恵
東北大学金属材料研究所・新素材共同研究開発センター・教授
〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1
rieume@imr.tohoku.ac.jp

SJWS 北海道・東北ブロック 活動の記録

1975年：前年、仙台にて東北で初の「婦人科学者のつどい」が開催されたのを機に、東北支部が発足しました。

支部長：後藤たえ（宮城学院女子大学生生活科学研究所）

幹事：鈴木益子（東北薬科大学）・熊野伸子（東北大学抗酸菌病研究所）

担当者名

1991年7月～1997年6月	支部理事：鈴木益子・熊野伸子
1997年6月～1999年6月	支部理事：鈴木益子・熊野伸子・荒谷美智（環境科技研） （2000年1月、鈴木益子新会長就任、2003年6月まで務めた。）
2000年1月～2001年6月	支部長：栗原和枝（東北大多元研・事務会計担当） 支部理事：荒谷美智（青森地区活動担当） 支部理事：矢後素子（岩手医大・「東北通信」担当）
2001年7月～2003年6月	支部長：栗原和枝（事務会計担当） 支部理事：矢後素子（「東北通信」担当）
2003年7月～2005年6月	支部長：宮城妙子（宮城県立がんセンター研究所・事務会計担当） 支部理事：矢後素子（「東北通信」担当）
2005年7月～2007年6月	支部長：矢後素子（会計・「東北通信」担当） 支部理事：藤田禮子（東北薬科大学・事務担当）
2007年7月～2009年6月	支部長：藤田禮子（事務担当） 支部理事：矢後素子（会計・「東北通信」担当）
2009年7月～2011年6月	支部長：藤田禮子（2010年学術大会実行委員長） 支部理事：本間美和子（福島医大）、矢後素子（会計・連絡担当）
2011年7月～2013年6月	支部長：藤田禮子 支部理事：本間美和子、矢後素子（会計・連絡担当）
2013年7月～	支部長：本間美和子 支部理事：高橋まさえ（東北大学農学部） 矢後素子（会計・連絡担当）
2014年4月1日	「日本女性科学者の会」が一般社団法人化。 支部長：本間美和子 支部理事：高橋まさえ、平野浩子（岩手医大）
支部制からブロック制へ変わり、北海道・東北ブロックが発足。	
2015年5月～	ブロック長：平野浩子 ブロック理事：梅津理恵（東北大学金属材料研究所）、本間美和子
2017年5月～	ブロック長：小川美香子（北海道大学薬学研究院） ブロック理事：梅津理恵、本間美和子
2019年5月～	ブロック長：梅津理恵 ブロック理事：小川美香子、本間美和子

文責：梅津理恵

北海道・東北ブロック長

2020年3月9日（国際女性デーの次の日）

六ヶ所村を訪ねて

益見 厚子

青森県青森市で大学教員として勤務開始して5年目の春、10日間大連休2日目、昨年日本女性科学者60周年の会で初めてお会いした環境科学技術研究所の荒谷美智先生を訪ねることになった。3カ月余りに渡る北海道・東北ブロックの選挙管理委員の役目を終えてようやく落ち着き、この間荒谷先生から送られてきていたいくつかの資料について返事もできずにいたため改めて先生を伺うことにした。青森に来て4年も経過しているが自家用車のフィットでこれまで一度に14km以上走ったことがない私が、今回青森市の自宅から六ヶ所村のスワニーという文化交流施設の待ち合わせ場所までの74kmを一揆に走ることとなった。スワニーという文化交流施設近辺には科学技術環境研究所を始め多くの関連施設と市民の施設が集まっている。

一般道を走った。ひたすら東へ進む。フィットのナビが途中で狂って道がないのに300メートル先で右折などと指示してきたりもしたが、最終的にはなんとか遠回りでも目的地には到着できた。2時間はかかった。

目的地に到着すると間もなく荒谷先生とお会いできた。荒谷先生は六ヶ所村で原子力関連事業に関する仕事をしておられ、関係資料を私に渡してご活躍の事業内容の説明を始められた。荒谷先生は東京大学原子核研究所、その後理化学研究所勤務を退任されてから関係部署の青森県六ヶ所村に所在する環境科学技術研究所に移られた。当初は3年契約だったそうだが5年10年と仕事を依頼され続けられている凄腕の科学者だ。そのせいか言動や行動が凄くお若い。

先生から渡された資料には、「六ヶ所村の女性達の発信」という書物の中に六ヶ所村文化協会読書愛好会会誌として核燃料サイクル立地地域の事業と民情に関わる内容の資料が収められている。先生はこの会誌を編集しておられ、平成7年から今日までの活動内容について説明された。そして先生の話からは、東北地域の限られた地域の現状をもっと多くの方々に知ってほしいという印象が感じ取られた。

その後は私の運転で小川原湖の道の駅でランチ、次に十和田の「Namiki」という店で名物のアイスクリームをご一緒した。「Namiki」は荒谷先生が頻繁に通っていらっしゃるお店で紹介してくださった。そして桜が満開の時期だったので桜トンネルでのお花見ドライブスルーは印象的だった。

私はこの日を一生忘れることはない。1日を長時間ドライブで過ごし、荒谷先生を助手席に乗せてのドライブをしたこと、そして貴重な先輩とも言える女性科学者と青森県内で交流できたことだ。放射線、核化学というご専門を生かしながら地域住民の生活に貢献しておられる荒谷先生に計り知れない尊敬の念を抱きながら帰路に着いたのであった。



荒谷先生と六ヶ所村文化交流プラザ、スワニーにて

益見 厚子
青森大学薬学部

札幌で過ごした日々の思い出と45年ぶりの仙台

山田 恵子

はじめに

私は昨年（2019年）の2月、1973年から暮らした札幌を離れ、故郷である仙台に移住しました。父や母の介護、その他で仙台に帰る機会が多くあったものの、大学院修士課程を修了してすぐに仙台を離れたので、実に48年ぶりの仙台でした。私は父母の疎開先である遠刈田温泉とうがきだで生まれ、その後大河原町おおがわらを経て、小学校2年の2月に仙台の今の場所（霊屋下）に移り住み、その後、米ヶ袋に移転したものの、大学院修士課程を卒業するまでの約16年を仙台で過ごしました。大河原に移ってから、蔵王の麓に残った祖母を訪ね、山の暮らしを満喫して育ちました。子どもの頃の思い出の詰まった土地、そして思春期のややこしい時期を過ごした土地、そしてそここでの様々な思いが、私を故郷に呼び戻したのではないかと思います。札幌で過ごした年数の方が格段に長いのですが、楽しいことも多かったけれど、悔しい思い、裏切られた悲しみなどの負の部分も沢山あって、札幌は私にとって複雑な街でもあります。そして札幌での生活はいつもどこかに「よそ者である」という意識があったように思います。仙台は48年の間に大きく変化していましたが、お店の方やバス停でのおばちゃんたちの仙台弁に出会い、故郷に戻ってきたと言う安心感を覚えました。大きなタワーマンションが建ち並び、住居表示もかなり変わっており、戸惑うことが多くありますが、わたしの移住先の霊屋下おたまやしたは、川と山に囲まれた狭い地域のため、あまり変わらない姿で私を迎えてくれました。



子育てをしながら研究者として過ごした北海道では、いろいろ沢山の経験をしました。それらと移住してからの仙台での生活についてつらつら書いてみたいと思っています。

約40年に及ぶ札幌医大での研究生活

大学院卒業後、秋田県立脳血管研究センターでの3年間の研究生活を経て、夫の勤め先の札幌に移りすみました。まだ飛行機も一般的ではなく、仙台-青森間が4時間、青函連絡船が4時間、函館から札幌までの汽車が4時間、計12時間の長旅でした。函館を出るとすぐ、何も無い荒地が広がり、とんでもないところに来てしまったと言う思いとその殺伐とした景色を忘れることはありませんでした。当時、仙台にいてさえ、津軽海峡越えはハードルが高く、親には「親の死に目に会えない覚悟があるか」と言われたことを思い出します。

私は農学部の栄養化学講座を卒業しましたが、秋田での指導者もいない3年間の研究員時代に、基礎ができていない自分に気づき、栄養学の基礎となる生化学を一から学びたいと考え、就職先がないまま、札幌医大の第二生化学講座の研究生になりました。その後すぐ助手のポストが空いたため、運よく正職員になることができました。しかし、その際、非医学部出であること、女性であること、そして北大出身者でない事により、今後の昇進は望めないことを宣告され、その名の通り、その教授が定年になる40過ぎまで、助手のまま過ごしました。その後、新しい教授のもとで講師になりましたが、非医学部出の私はこれ以上の昇進は望むことができないまま、保健医療学部開設により、助教授として転出しました。保健医療学部でも、看護師や作業療法士、理学療法士ではない私は昇進の機会

があったものの、想像を絶する裏切りにあい、教授選考で敗北、助教授（准教授）のまま、定年を迎えました。常に男と戦ってきた私が、女性もまた敵になりうることを経験した出来事であると同時に、女性の昇進は、その女性の実力だけではなく、置かれた人間関係に左右されることを学びました。

保健医療学部への移動は、良いことも沢山ありました。それまでの私は講座制の中で生きていたため、常に教授のテーマを研究してきました。しかし、保健医療学部では独立した研究者として仕事をすることができ、従来のテーマに加え、分野の異なる方々との共同研究も可能になり、視野が広がったように思います。また、利尻島での地域医療実習やそれにかかわる企画の責任者のポストも、教授選考に敗れ、化学から生物の教員に変わらざるを得なかったことにより経験できたことで、そこで培われた他の職種の方々との交流は私の財産となりました。

研究生活で東北人の粘りが発揮されたかなと思う二つのエピソード

私は保健医療学部に移るまで、二人の教授の下で研究生活を行いました。長い研究生活において、自分が東北人であると感じたエピソードを2つ紹介したいと思います。一つは糖脂質交換タンパク質に着目し、研究を始めた時のことです。私が属していた研究室は当時リン脂質交換タンパク質の存在を見つけ、それに関する研究をしていましたが、その発展として糖脂質交換タンパク質もあるはずだとの仮説を立て、実験を始めました。しかし、何度試みても失敗ばかりで先の見えない状況に、当時指導者であった助教授はついに「もうやめよう」と言い出しました。私はまだ検討の余地があると考えていたので、「もう一回だけ試させてください」と申し出て、ついにその存在を証明できる結果を得て、その後の発展につながりました。私のねばり勝ちでした。

2つ目は、新しい教授とたった二人で新しいテーマとなるジアシルグリセロールキナーゼ (DGK) に関する実験を始めた時のことです。教授は前任地で世界で初めてブタの脳からこの酵素の精製に成功し、抗体を持っていました。この酵素の遺伝子のクローニングに向けて、この酵素がブタのどの器官により多く含まれているのかを検討するために、屠殺場に行き、ブタの各器官を貰ってくる計画をたて、欲しい器官のリストを持ち、二人で札幌郊外にある屠殺場に向かいました。屠殺場では職人の方が、各器官を切り取ってくれました。脳や肝臓などは問題なく手に入れることができましたが、隣の部屋で待機していた私たちに、「胸腺はどこだ。わかんねえ」という職人さんの言葉が聞こえてきました。それを聞いた教授は「胸腺はいいことにするか」と言いましたが、わたしは「胸腺も計画に入っているの、もう一度お願いしましょう」と頑張り、職人さんも根負けして頑張ってくれ、無事胸腺を手に入れることができました。そして、その後の実験で胸腺に脳の何十倍もの DGK が含まれていることがわかり、それがブタ胸腺からの世界初の DGK α の遺伝子のクローニングにつながり、その成果は Nature に掲載されました。

北海道の方がよく使う言葉に「いいんでないかい」という言葉があり、割合簡単に諦めるような方が多いような気がしていました（わたしの感想です！）ので、常に「よそ者」として扱われていた私は東北人の粘り強さを武器に生活していたように思います。

研究者としての生活と子育ての難しさ一息子の思いがけない不登校

下の子供である息子が中学校に入学し、息子が学校を休み始めたのがそれから続く長い長い息子との戦いの始まりでした。経過についての詳細は省きますが、今、当時の日記などを紐解く機会があり、親としてその生き方、研究者と母との両立など、反省する点も多くあるので、後に続く者へのメッセージとして私なりの考えを述べようと思います。

私は女の姉妹の中で育ち、中学・高校を女子校で過ごしたこともあり、男に負けたくないという思いが強かったように思います。そのため、職場では、夫も子供もいないふり(?)をし、5時から始

まる会議やセミナーも平気なふりをしていました。当然、そのしわ寄せは子供達に降りかかるのですが、それに気づかず、子供達や夫に甘えていたように思います。息子が「帰りが遅い」と文句を言うたび、それが「もっと構って欲しい」というメッセージと気付かず、「お母さんだって遊んでいるわけではない」と自分の行動を正当化し、息子の寂しさに気づくことはありませんでした。一般に、男の子は女の子に比べ、寂しがり屋であり、母親が働くことへの理解をするようになるのが女の子よりも遅いのではないかと思います。その時は気づかず、自分の行動を正当化していました。また、周りの先輩たちからのメッセージも「中学生になると楽になるよ」と言うものばかりで、思春期のややこしさを伝えてくれる方は居ず、長い外国への出張などできると張り切っていました。ある時期、効率は落ちたとしても、もう少し子どもたちとの生活を大事にしていたら、お互いが長い間苦しまないですんだのかもしれないと反省しています。

札幌での「北海道女性研究者の会」の活動について

北海道女性研究者の会とは？

わたしは長い間北海道女性研究者の会の活動にかかわってきましたので、この会についても紹介したいと思います。この会は1975年国際婦人年を契機とした学術会議の女性研究者の取り組みに応え、第一回婦人研究者連絡会（当時仮称）が持たれ、その後北海道婦人研究者連絡会として年に数回の集まりや名簿の作成、通信の発行などを行ってきました。1999年には「改正男女雇用機会均等法」、「男女共同参画社会基本法」が施行され、法的な整備が進み、女性研究者の数の増加、就労の機会が拡大された分野がある一方で、ジェンダーバッシングなどの声も耳にしました。この会は1996年の総会で婦人を女性に変更され、それ以降、北海道女性研究者の会の名称で活動を続けています。女性研究者問題の多くは社会的解決が必要ですが、研究者自身も力を合わせ、問題解決の方法を様々な角度から考えてみる必要があると考え、視野が狭くなりがちな状況の中で互いに経験を語り合い、励まし合っていくというのがこの会の基本にあります。そのため、この会は研究者はもちろん、研究者を目指す方、かつて研究者であった方、研究的な仕事をしている方、研究と関わっていきたくて思っている方、通信を読みたい方、女性研究者問題に関心のある方などの多くの方を対象としています。その結果、文系、理系を問わず、あらゆる分野の方が会員となっており、理系である私はこの会での会員との交流により、自分の知らない世界に触れることができました。

北海道女性研究者の会との関わり

1973年に札幌に来てからの数年はこの会の存在を知りませんでしたが、会の存在を紹介されてからも例会の多くが夜の開催だったこともあり、熱心な会員ではなかったように思います。さらに会員の多くが北大関係者だったことも、私の参加に対する気後れの原因でしたが2002年に誘われて世話人の一人として、積極的に会の運営などに参加することになりました。その時の世話人は私を含め三人でした。当時、会員を取り巻く環境の変化により、会の活動が低迷化しており、会の存続を危ぶむ声や発展的解消を提案する声もありました。各地域におけるこのような会が次々と解散してしまう時期でもありました。「辞めるのは簡単だが、せっかく先輩たちが立ち上げた会を自分たちの代で消滅させる訳にはいかない。年に数回持たれていた例会を年に一度にすることで世話人の負担を減らし、代わりに通信を充実させることで会員の交流を計ったらどうだろうか」と生意気な発言をした結果、「それなら代表をお前がやれ」と言うことで2008年の総会で代表になることを承認されました。当時は任期などの規程もないまま、札幌を去る2019年3月まで代表を務めさせていただきました。代表になった際の世話人はたった三人だったので、強引に医大の友人を引き込み、当時の通信作成作業をたった二人で行なった結果、当然間違いも多く、それを非難されたり、また長い間代表をやっているために私物化しているなどの叱責も有り、密かに涙したこともありました。しかし、その後、世話人も5人、7

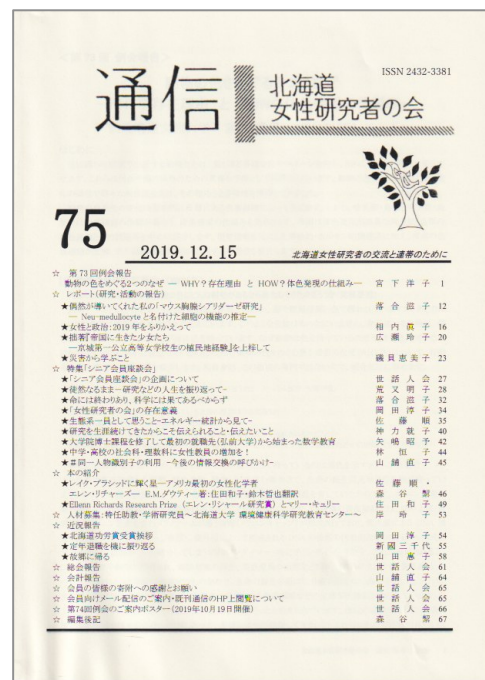
人、と増え、仕事の分担や相談も行える環境が整い、私もアドバイザーとして世話会に残りました。

先にも述べたように、例会・講演会と通信の発行を年一回とスリム化し、講演会は北海道教育委員会の後援を受けることで、新聞や札幌市の様々な窓口にパンフレットを置いて貰うことが可能になり、講演の内容によっては部屋に入りきれないほどの人数が集まったこともありました。例会に参加できない会員も、通信なら参加できるということで、投稿して下さり、その内容は例会の報告、研究や活動の報告、近況報告、本の紹介、会の運営に関する報告など自由で多岐にわたり、毎年 50 ページを超える枚数を維持しています。その他、札幌市男女共同参画センターによる男女共同参画活動団体紹介冊子への活動内容掲載、北海道女性プラザサポーター登録なども行い、そこで行われる企画などをメールで会員に配信しています。通信は 2016 年の総会で ISSN (International standard Serial Number : 国際標準逐次刊行物番号) 申請が承認され、2016 年の通信 72 号から通信に ISSN の印字と国立国会図書館への納本が開始されました。女性研究者の様々な思いを綴った通信が皆様に呼んでいただける形になったことは大変嬉しいことでした。

その間、30 周年記念行事として、パネルディスカッション「女性研究者の過去・今。未来」と北海道の女性研究者の実態調査 (2008 年 3 月～4 月実施) を行いました。対象はインターネットで女性研究者の名前を調べることでできた大学・短大在籍の教員、大学院生で最終的に 195 名から回答がありました (回答率 17.3%)。「仕事や研究で困難を感じたことがありますか」、「今まで仕事と生活の両立で困難を感じたことがありますか」の問いに対してそれぞれ 74.9%, 67.2%の方が「ある」と答えており、子育てや介護に関わることの多い女性研究者にとって、仕事と研究の両立が難しい状況にあることがわかりました。

また、2015 年に創立 40 周年を迎え、北海道大学女性研究者支援室との共催で「40 周年記念ジョイント・シンポジウム-今までの大学、これからの大学-」を行いました。40 周年を迎えた会のことは北海道新聞の取材も受けました。また昨年 9 月にはシニア会員によるシニア会員座談会が持たれ、女性研究者が少ない時代の苦労話や若い方々へのメッセージなどが話し合われました。

現在は、世話人の数も増えた結果、役割分担もスムーズに行われており、世話人の負担が一人に集中しないような工夫もされていますが、若い人たちの会への参加がなかなか伸びない状況にあります。特に創立時に活躍された北海道大学関係者の若い方々の参加が少なく、このような会の存在理由をきちんと発信していくことが今後の課題かと考えています。



帰ってきた仙台での生活

さて、故郷に帰ってからの私の生活は、思い描いていた通りなのか。それともこんなはずではなかったのか。答えは今のところ、移り住んで正解だったということです。脚にトラブルをかかえているわたしは、現在最低でも一日 6,000 歩、歩くことを自分に課し、せつせと瑞鳳殿に行く坂を上ったり、広瀬側の堤防を歩いたりしています。季節により、活躍する鳥や虫、咲く花々や草木は違いますが、自然の中での生活は、札幌ではなかったことでした。そして、自分で言うのはおかしいのですが、イライラすることが減り、穏やかになったように感じています。そして、自然と戯れ、自然の中で生き

ることの楽しさが少し分かったように思います。都会の生活に疲れた方々が田舎での生活を求め移住支援の窓口で連日押し掛けている番組をテレビで見ましたが、分かる様な気がしますし、現役時代に学生を連れて行った利尻島（地域医療実習で約一週間滞在）の住民の暖かいおもてなしが生まれる理由がわかったようにも思いました。仙台は、適度の都会であり、適度に田舎ですので、そういった意味でもわたしの移住は成功だったと考えています。

仙台は学生生活を送った場所でもあります。札幌では、いろいろな場所によそ者扱いもされ、淋しい思いもしましたが、仙台に来て母校がすぐそばにあることがこんなにこち良いことなのかということを実感しています。恩師がまだ研究室を持っていますので、ぼけ防止に実験を手伝うことになったことも嬉しいことの一つです。出身の研究室も歴代、同窓生が教授になっているため、先輩としてすこしでかい顔ができます。

もうひとつ、こちらで私なりに、お手伝い出来ればいいなあと思っていることが、日本女性科学者の会・北海道東北支部の活動です。昨年の理事の選挙では、破れてしまいましたが、現役で忙しい現理事を助け、一時途切れてしまった「東北通信」を復活することで、先に述べた北海道女性研究者の会での通信作成作業の経験を生かし、会員の交流を図る手助けになれば良いと考えています。「東北通信」をなんとか復活させたいと思い、言い出しっぺの私もこの原稿を書いた次第です。

来年度から、石巻の日赤看護学校の生化学を担当します。教えることは大好きなので、仙台でもその仕事ができるのは嬉しい限りです。また、数年前から関わっているWeb版教科書「人間の生命科学」（分担執筆）の改定版作成の仕事やその本に関する問題集作成の仕事もあります。この教科書は人間の一生を軸に構成されており、現在多くの高校や大学で使われています。興味のある方は、連絡を頂ければ、教科書へのアクセスの方法をお知らせ出来ます。

姉や妹、そして姪の多くも仙台にいますので時々会ってのおしゃべり、高校や大学時代の友人に会うのも嬉しい限りです。

山田 恵子

元札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門 准教授

住所：仙台市青葉区霊屋下 12-12

TEL：022-393-9982

メールアドレス：oyama@sapmed.ac.jp



震災と関連する想い

本間 美和子

2011年6月に一本の電話を頂き、文部科学省女性研究者支援事業へ大学事務局の応援を得て申請することになった。こうした応募は環境整備という組織改編を伴う事業であるため、一教員のアイデアだけでは申請不可能であることを同時に知った。所属の県立医大ではすでに県事業の一環として女性医師支援センターが稼働しており、24時間学内保育はもちろん病児保育施設もあって、「わりと進んでいる」「なんとなく、女性が多いよね」という自負が学内にはあった。

その言葉を契機に「実態を知る」ためのデータがいかに重要であるかを認識し、その後は日本分子生物学会委員会や、栗原一枝先生が会長を務められた頃からの男女共同参画学協会連絡会ワーキンググループの活動においても、意識調査アンケートとは明確に区分して研究者実態把握のための様々なデータ収集に注力した。その分析と解釈を仲間とディスカッションしながら繰り返す活動を「あぶりだし」と称して、その後の提言や広報等のアウトプットへ結びつける活動(学協会連絡会リーフレット「無意識のバイアス」にも掲載)はとても楽しくまた有意義な経験でもあった。そしてSJWS活動においても、特に福島県内の中学高校生への活力と理系選択支援を促す活動の一環として、女性科学者や新聞記者、テレビ報道プロデューサー等による講演会「サイエンスネットワークを広げよう」(於、東京ウィメンズプラザ)へ17名の高校生を福島からお招きして、理系女子育成に向けたささやかな活動を行った。実のところ、参加した高校生の学校は当時もまだ被災者が校内におられ、生徒たちはプレハブ校舎で授業を受けていたのである。そして2014年は「内閣府 国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業」の支援を受け、SJWS主催による「理系の仕事〜いつか未来を創るあなたへ〜」を福島市内にて、210名の高校生を含む参加者とSJWS理事等の協力を得て開催することができた。いずれの行事も学生さん達からいただいた感想文は、講演者各位のエネルギーをまっすぐに受留めたチカラ強いものであった。人と人とが真摯に向き合い対話することが、若いココロをいかに揺り動かし、彼らへ大きなインパクトを与えるかを実感できる喜びの機会となった。

そして毎年3月が近づく、特に東北地方では東日本大震災と関連するニュース等が連日のプロット番組として放映されるようになる。日々復興はもちろんだが、多くの犠牲を払った震災の記憶を風化させないこと、まだある風評被害を払拭するにはどうするか、様々な工夫が紹介される。そうした深刻な課題に直面するたびに誰しも残念な気持ちになるわけであり、また、個人的には風評被害は「いじめ」と相通じるものがあるのではと感じるためか、その根底にある人間の心理を解き明かす科学の力も求められるように思う。特に震災と関連する移住先で受ける小さなお子さんたちの心の痛手を思うと、解決の糸口がどこにあるのかと暗澹たる気持ちになる。

風評被害の一つの定義は、「前もって起きた何か」を契機にある特定の商品購入を避けることでリスクを回避しようとする消費者行動が、売る側へ経済的負の影響をもたらすこと、とある。そして特定の対象への不当で過剰な負の評価により、忌避行動や誤解、オーバーリアクションを起こさせる根底には「**stigma**(負のレッテル)」という心理要因がある、という興味深い解釈を見つけた(工藤大介他「東日本大震災に伴う風評被害」社会心理学研究 30(1), 35-44(2014)を引用、一部改編)。それに倣って「いじめ」を考えれば、同質性を好ましいとする習性に相反する対象を「異質なもの」と勝手に

定義し(stigma)、相手を排除しようとする行動である。いじめの当事者はそれによって優越性を獲得し自尊心を回復する合目的性がある、と解釈することもできる。この社会心理学論文は、震災後に福島産農産物が対象となっている忌避行動について、心理的要因を探求している。結論として、放射線に対する不安感はその地域名(福島)の産物まるごとに対する不安感と同一になっている人を対象に、放射線量は安全域レベルという実データや科学的知識を与えて合理的判断を促しても、放射線リスクなど科学技術に対するネガティブな感情やそれに伴う stigma は払拭しきれない、と述べている。つまり次の方策としては、科学的知識に加えてポジティブな感情(例えば被災地の人々を助け応援したい)を喚起することが stigma の抑制につながる、と提唱している。

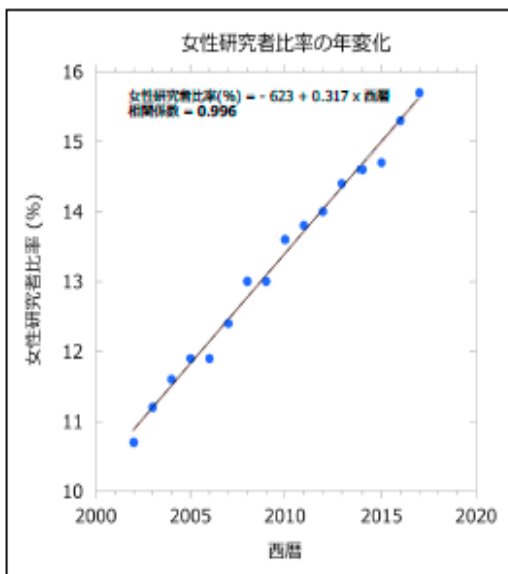


図1 女性研究者比率の年変化。
総務省「科学技術研究調査」統計トピックス No.100 (H29.4.14) のデータを利用して作画。

これに準じて理系啓発に向けた教育の場を考えれば、科学的知識を与えるだけではなく、楽しくて面白いと感じる心、そして向上心を刺激するポジティブな試みが重要であるかもしれない。「なんとなく」の曖昧さに何か引っかかっていた私の心に、とても腑に落ちる結論をいただいた気持ちがした。Machi Dilworth 先生が先の60周年記念事業の折にご講演の中で紹介された左図のデータが示すように、女性研究者比率は年々上昇しているものの、現状の伸び率では30%に到達するのは2060年まで待たなければならないと予測される。このような実態を知ること、それを加速するための知恵を出し合う必然性が認識され、その土俵が初めて生まれる。その方策と実行につながる活動が、ここ東北の皆様のエネルギーを結集して進められる日もきっとあることと切望いたします。

藤井良一「男女共同参画(ダイバーシティ)推進に関する評価手法」
 学術の動向12, 32-35 (2018)

本間 美和子
 福島医大 医学部准教授



編集後記

梅津北海道・東北ブロック長の「理事会より」の中に書かれているように、長い間お休みしていた「北海道・東北通信」を再開させることになり、その編集作業をこのたびお引き受けすることになりました。長い間札幌に住み、様々な会合へのお誘いを受けはしたものの、なかなか出席することができなかつた中で、時折届く「北海道・東北通信」を読むことで、会員の皆様とつながっていることを感じる事が出来、何度か投稿もさせていただいたことが懐かしい思い出となっています。北海道で関わっていた北海道女性研究者の会でも、年一回の例会への会員の参加は必ずしも多くなく、お互いの情報を交換する場が限られていました。しかし、通信を充実させることにより、例会には出席出来ない会員からの投稿が増え、また、転勤や退職などで北海道を離れた方々とも通信が交流の場となっています。そんな経験が、わたしが編集のお手伝いをかってでた理由です。長い間、わたしの大学の友人である矢後素子さんが通信作業を一手に引受けて下さっていたことも知りました。いままでの彼女のご苦勞に感謝するとともに、復活した通信をより良いものにしていくお手伝いをする機会を与えて下さった東北ブロックの理事の方々に感謝致します。

(文責：山田 恵子)

編集：梅津 理恵、小川 美香子、本間 美和子、山田 恵子
発行：日本女性研究者の会 北海道・東北ブロック

